
100円玉

チョコラッコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

100円玉

【Nコード】

N1815R

【作者名】

チヨコラッコ

【あらすじ】

片思い・両思い・かなわぬ恋……。詩調で描く色んな恋の物語。
あなたは今どのタイプの恋をしていますか？

く100円玉と私く

あなたへの片思いも3年目。

私と彼の出会いはたった一つの100円玉。

自販機から転がった100円玉拾ってくれた瞬間。

突然やってきた。

体中が熱くなった。

思うだけで胸が熱い。

すれ違うだけで息が苦しい。

部室へ向かう通り道

サッカー部の彼が見える。

笑った顔。

真剣な顔。

疲れた顔。

すべてが私の元気のミナモト。

怪我した彼を見かけた。

離れた場所で救急箱を見ていたマネージャーに
持っていたバンソウコをこっそり渡した。

放課後、彼が教室にやってきた。

私の名前を呼んで

『ありがとう』

笑って言った。

お礼につて飴玉を一つ私の掌に落とした。

時間が止まればいい。

本気でそう思った。

この飴玉は私のお守り。

卒業まであと3ヶ月。

苦手な化学のテスト。

やっぱり追試験。

彼は理数系のクラス。

彼と同じクラスの友達と化学の勉強。

もちろん彼の教室で。

彼の席がどこか知ってるけど、

少し離れた席にした。

部活が終わって戻ってきた彼と

一瞬目が合った。

でも気持ちバレルのが怖くて

すぐにノートに視線を移した。

おかげで少し化学が好きになったよ。

同じクラスのサッカー部員が

彼のうわさをしていた。

卒業式に好きな子に告白するらしい。

心臓を掴まれたように

いつもとは違う胸の苦しさ。

色んな女の子の名前が聞こえたけど

その中に私の名前はなかった。

分かってはいたけど。

家に帰って親に聞こえないように静かに泣いた。

それでも、やっぱり彼が好き。

たくさん泣いて

明日からまた残りの時間

あなたに恋をするんだ。

卒業まであと3日。

みんなとこうして会うのもあと3日。

教室の掃除も

窓からあの山を見るのも
この廊下を歩くのも

あと3日。

彼への片思いもあと3日。

卒業式。

私も片思いから卒業する。
最後に気持ちを伝えよう。
ずっと前から決めていた。
ポケットから

あの日彼からもらった飴を取り出し
口に入れる。

とっても甘くて。

なぜか涙がでた。

鏡を出して涙を拭いて

思いきり笑顔を作る。

そして

貴方の教室に向かって歩く。
口の中の飴玉がなくなつて
彼が歩いてくるのが見えた。
ドキドキして

手が震えて

歩く足の間が分らない。

そして彼とすれ違った。

私は足を止める。

やっぱりちゃんと伝えなきゃ。
明日から次に進めるように。
私は彼に向かって振り返った。

少し離れた彼がこっちを見ていた。

私はゆっくりと前に進んだ。

彼もこっちに歩いてくる。

どうしよう。

でも言わなくちゃ。

足が震えて思うように進めない。

目の前の彼が今度は

私の前で止まった。

彼の掌には100円玉。

「一緒にあの自販機まで行かない？」

真っ赤な顔で

彼が笑った。

真っ赤な顔で

私は頷いた。

自販機に着いたら何を話そう。

「ここで会ったあの日からずっとあなたが好きでした。」

く100円玉と僕く

あの日100円玉が転がってきた。
それを拾って顔を上げた。
僕の恋の始まり。
この恋も3年目になる。

サッカー部の僕は、
なるべく早くグラウンドに出る。
あの道が彼女の部活への通り道。
彼女があそこを通ると
いつも

グラウンドを見ていることを知っている。
彼女の視界に入りたい。
僕を少しでも見てほしくて。
少しだけ期待をしてもいいですか？

練習中に怪我をした。
たいした怪我じゃないけど。
マネージャーがばんそうこを持って来てくれた。
救急箱の分は切らしてたけど
あの人くれたからって
校内に入っていく彼女を指差した。
走ってもいないのに
心臓の鼓動が早くなった。
部活が終わって
急いで彼女の教室に走った。
いつも持ち歩いている飴玉を持って。
入り口近くで1回止まって深呼吸。

教室を覗くと彼女がいた。
僕は初めて彼女の名前を呼んだ。
彼女は気づいて歩いてきた。
僕はお礼を言つて
飴玉を彼女の掌に落とした。
少し照れたように笑つた彼女。
ずっとこうして見ていたい。
そう思つた。

卒業まであと3ヶ月。
部活が終わつて教室に戻る。
教室の奥の席に彼女がいた。
夢かと思つた。
化学の勉強を教えてもらつていいのか。
そう思いながらみていたら
彼女が顔をあげて
一瞬目が合った。
けれど彼女はすぐに
下を向いてしまった。
中身だけでもあの友達と入れ替われたら
どんなにか幸せだろう。
僕は少し変ですか？

同じクラスの彼女の友達から
彼女には好きな人がいることを聞いた。
3年間ずっと同じ人を好きらしい。
僕と同じだ。
彼女のことを3年間好きなように。
彼女にもそういう人がいるんだ。
僕と同じように

彼女もこんなに胸が苦しい思いをしているんだろうか？

高校生活もあと3日。

彼女がいるこの学校で

彼女の姿を見れるのも

あと3日。

ポケットの飴玉を見ながら

3年間でたった1度

彼女と接したあの日を思い出す。

彼女のことを考えると

息が出来ないくらい

胸が苦しい。

あと3日しかないなんて

どうしてもっと近づく努力をしなかったんだろっ。

今日は卒業式。

昨日僕は決めたんだ。

3年間のこの想いを

きちんと彼女に伝えよう。

この恋は本物だって

自分にも自身が持てるように。

僕は100円玉をポケットに入れて

教室を出た。

100円玉が恋の始まり。

向こうから彼女が歩いてくる。

こんなチャンスはない。

グツと歯を食いしばって

まっすぐに歩く。

彼女に向かって。

けれど声を掛けられず

彼女とすれ違う。

少し歩いて立ち止まった。

ダメだ。

ちゃんと伝えなきゃ。

振り返りもう一度彼女に向かって歩こうとした。

少し離れた彼女が振り返りこっちを見た。

僕はゆっくり歩き

彼女の前で立ち止まった。

手に持っていた100円玉を出し

彼女を誘った。

「一緒にあの自販機まで行かない？」

真っ赤な顔で

彼女は頷いた。

真っ赤な顔で

僕は笑った。

あの自販機の前で僕は彼女に伝えたい。

「3年前ここで君と初めて会ってからずっと好きだったんだ。」

「数学を好きになった訳」

今日も軽快な音が教卓から鳴り響く。

黒板には沢山の数式。

窓側の一番前の席は

日差しが良く当たって

斜め前に立っているあの人が

更に輝いて見える。

白いYシャツの袖を少しまくり

そこからのぞく太く長い指が

とても魅力的。

叶わぬ恋。

手の届かない彼。

私と彼は

生徒と教師。

彼との出会いは

2年前の夏。

産休に入る数学教師の代理で

彼がクラスにやってきた。

少したれ目で細長い二重の目。

すらっとした立ち姿。

あどけない笑い顔。

すべてが私の中に

溶け込んできた。

それから私は数学を

一生懸命勉強した。

3年生になって
理数系を選択した。
彼の中に私の存在を刻みたかった。
少しでも他の生徒より
数学のできる生徒としてでもいい。
どんな形でもいいから
彼に近づきたい。

卒業式まであと3カ月。
授業中、問題を解いてると
彼が窓際にやってきて
窓の外をじっと見ていた。
私は彼に言った。

「このテストで100点取ったらデートして」
口から出るのは冗談交じりの言葉。
心の中は本気一色。

「100点とれたらな」
彼も冗談交じりの言葉。
きっと心の中も冗談一色。
結果は100点。
でも100点と聞いて
何だか少し寂しくなった。
あんなこと
言わなければよかったって。
叶わぬ恋だと思い知らされたようで
胸が苦しい。

卒業式まであと3日。
ほとんど授業がない毎日。
彼がこの教室に来ることはもうない。

きつと彼と話すことももうない。
教師と生徒。

私はなんて無謀な恋をしてしまったんだろう。
結果なんて初めから分かっていたのに。

今日は卒業式。

みんなと写真をとったり
最後の時間を教室で過ごす。
みんなに「元気でねっ」て
そう言つて

一人で教室を出た。

靴を履き替えて校門を出た。
少し先に彼がいるのが見えた。
私は嬉しくて哀しくなる。

これで本当に最後なんだ。
彼の近くまで来て

ありがとうございました。

そう言つて頭を下げた。

顔を上げた私の前に

彼は1枚の紙を出した。

100点の私の答案用紙。

「100点取つたらデートする話、まだ有効かな？」

真面目な顔で

彼は言った。

泣いた顔で

私は笑った。

今日は卒業式。

私と彼は生徒と教師。

彼は少し照れたような真面目な顔で言った。

「今日、校門を出たら君はもう生徒じゃないんだよ。」

今、この瞬間から

教師と生徒は

彼氏と彼女。

〈100点の答案用紙〉

俺のとりえは明朗快活な性格と
数学の知識。

職業は高校の数学教師。

人生の目標は

くいのないように生きること。

産休に入る教師の代わりに

担当クラスが一つ増えた。

2年生のクラスだった。

俺のフリーな時間が一つ減る。

かなり憂鬱だ。

扉を開けて教卓に立ち

とりあえず全員を見渡す。

一人の女子生徒がじっと俺を見ている。

授業中ずっと。

次の日も。

次の日も。

いつの間にか俺は

授業のない日も

彼女の姿を探していた。

生徒たちが3年生になった。

彼女を理数系のクラスで見つけた。

もちろん教えるのは俺。

窓際の一番前の席に

彼女が座っている。

太陽の光が彼女全体を照らし

一層俺の意識を惹きつけた。
彼女の存在が

俺の中で増幅する。

しかし心のどこかで抑制をする。

俺と彼女は

教師と生徒なのだから。

3年生が卒業するまで

あと3ヶ月。

今日は彼女のクラスで模試試験。

お堅い試験ではないからと説明をし

問題を解かせる。

生徒の様子を見て回る振りをして

彼女のいる窓際に立つ。

太陽が眩しくて

窓からの風はこんなに気持ちいいのに

俺の心の中は嵐のような海風が騒ぎ立てる。

不意に彼女が顔を上げて言った。

「このテストで100点取ったらデートして」

嬉しさの余りに

彼女の言葉に息が詰まった。

彼女の言葉はきつと冗談。

そんなこと分かっている。

「100点とれたらな」

俺も冗談げに言った。

心の中は本気一色。

胸が高鳴る彼女の答案用紙。

結果は100点。

彼女とデートをする場面を想像した。

これくらいは許してくれるだろう？

卒業式まであと3日。

彼女のクラスで授業をすることはもうない。

授業だけが彼女との接点。

彼女の残りの高校生活に

もう

俺が関わることはない。

教師と生徒。

愛してはいけない人を愛してしまったなんて

悲劇のヒロインになるつもりなどないけれど

教師と生徒の恋がタブーなんて

一体誰が決めたんだ？

100点の彼女の答案用紙を前に

胸が張り裂けそうで

今すぐにも彼女に会いに

あの教室へ行きたい。

今日は卒業式。

俺は精一杯考えた。

人生の目標は

くいのないように生きること。

結果がどうであれ

まわりから非難されても

くいの残ることはしたくない。

卒業式が終わり

俺は校門を出た。

この道は彼女の帰り道。

待っていれば彼女はここを通るはず。

1時間くらい待っただろうか。

もしかしたら今日はこの道を通らないのか。

心は焦る。

学校のほうをもう一度見る。

遠くから愛する女性が歩いてくるのが見える。

彼女も俺に気づいた。

近くまできた彼女は俺に

ありがとうございました。

そう言って頭を下げた。

俺はポケットから

彼女の100点の答案用紙を出し

彼女の前にそれを差し出した。

「100点取ったらデートする話、まだ有効かな？」

真面目な顔で

俺は言った。

泣いた顔で

彼女は笑った。

彼女は言った。

でも私たちは教師と生徒なのだ。

俺は少し照れたような真面目な顔で言った。

「今日、校門を出たら君はもう生徒じゃないんだよ。」

彼女は泣いた。

泣いてはつきりと言った。

「私も先生がずっと好きでした。」

今この瞬間から

君は俺の愛する
俺の彼女。

くさばてん

今日もいつもの帰り道。

友達と別れてあの角を曲がる。

道路の向こう側に見える。

たくさんの花が店頭に並ぶ花屋。

その中に一際輝く

僕の大好きな女性。

嫌なことがあってイライラしていた。

あの日も今日と同じ

この道を歩いていた。

ふと顔を上げると

花に話しかけ

につこりと微笑む彼女が見えた。

僕はその姿に見入ってしまった。

気がつくといライラなんか

なくなってた。

僕より多分5歳位年上の彼女。

でも年上なんか感じさせない

可愛い笑顔。

僕は彼女に近づきたくて

母親の誕生日にと

あの花屋へ行く。

店に近づいたびに

胸の鼓動が激しくなる。

外から店の中を覗くと

彼女が僕に気がついて

あの笑顔で挨拶をした。

僕は母親へのプレゼントだと言うと

彼女は『予算は?』と尋ねた。

正直僕の財布には100円玉が5枚。

無理ですね。

そう言った僕に彼女はまた微笑む。

小さなハート型のサボテンが植えてある鉢を

店の奥から持ってきて

ピンクのリボンで飾る。

『素敵なプレゼントよ』

そう言つて僕の手から100円をつまんで

鉢植えを僕の掌に乗せた。

母親の誕生日にと買ったはずなのに

何だか彼女から僕が貰ったみたいで

嬉しかった。

やっぱり僕のサボテンにしよう。

100円のサボテンが

何物にも変えられない物になる。

僕は彼女からそのことを教わった。

最近あの花屋に

彼女の姿がない。

やめてしまったんだろうか。

今日は卒業式。

僕は勇気をふりしぼり

花屋へ行くことにした。

店に入ると

年配のおばさんが一人

花束を作っていた。

僕はおばさんに彼女のことを尋ねた。

「彼女は今、新婚旅行中だよ。」

彼女は結婚してしまった。

彼女は他の男性のものになってしまった。

僕はまだ彼女に何もしていないのに。

そんな時間さえ僕には与えられなかった。

今の僕には何も出来ないけど。

僕はおばさんにサボテンを頼んだ。

ピンクのリボンで飾ってもらった。

100円をおばさんに渡し、

彼女に渡してもらおうよう頼んだ。

僕からの結婚のお祝い。

店を出て家に帰ると

すぐに自分の部屋へ駆け上がった。

窓際においてある

あの日のサボテン。

苦しくて辛くて。

そんな気持ちで

どんどん込み上げてくる。

僕はサボテンを手にとって

歯を食いしばって泣いた。

でもこれが恋。

彼女への恋心は色んなことを

僕に教えてくれた。

僕はサボテンに向かって言った。

「結婚おめでとう。お幸せに……。」「

天秤

少し前を歩く彼。

彫が深くて健康的に焼けた肌。

筋肉質の腕。

メリハリのある長い足。

私の好きな人。

でも

彼の隣には

私の友達。

そして

彼の彼女。

彼女よりも

彼を好きになったのは

私が先だった。

でも彼は

私よりも先に

彼女のことが好きだった。

初めから彼の心に入る隙間はなかった。

あの日彼女から彼氏が出来たと言われた。

相手が誰なのか分かっていただけ

知らない振りをして

誰なのか聞いた。

予想通りの答え。

少しして彼女から彼を紹介された。

苦しい気持ちを隠して

私は笑顔で向き合った。

それから3人で帰ることがしばしば。
前の2人を後ろで見ている私は
一体どんな顔をしているんだろう。
ちゃんと笑えていますか？

いつまでこの苦しさが続くのか。
そう思った時

彼に告白することも考えた。
でも

彼女のことも大好きなんだ。
性格も良くて
顔も可愛くて

女の私が見ても申し分ない女性。
彼女を友達として失うことも
私には出来なかった。

恋を取るか友情を取るか。
天秤にかける。

今は友情を取ろう。
彼女を失いたくない？
傷つけたくない？
違う。

今はこうして少しでも
彼の近くにいます。
彼女の友達として。
彼の近くにいます。彼の口実。
結局私は

彼女を利用することを

選んだのだ。

そして心の中の
もう一人の私が
心の奥で密かに願い
その時を静かに待っている。
2人の別れのときを。
そのチャンス。

時の天秤が友情から恋に傾くその日。
もう一人の私が動き出す。
でもきつとその時には
今の私が密かに願うに違いない。

恋に負けた友情が
どうか天秤のお皿から消えませんかように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1815r/>

100円玉

2011年10月8日18時34分発行